

エンディングノート 『再びの別れ』

第一章

秋山早苗は、八月に入った第二月曜日、自分の経営するラーメン店の休みを利用して、継母の久恵からの頼みで郊外にある大型店の一角にある本屋に来ていた。

「エンディングノートはありますか？」
メモを見ながら店員に尋ねる。

「エンディングノート？…ああ、あります。どうぞこちらです」
薄いA四版の、自叙伝のような書き込みのノートだった。

『家族に遺す貴方の言葉…』本の題名である。

…これは一種の遺言書じゃない。こんなものをどうするんだろう？と思いつながら代金を支払うためにカウンターに向かった。

早苗は現在四十三歳、ママ母である久恵が開いたラーメン店を承継して経営している。十年前に離婚し、今は十五歳の長女の優香、十三歳の長男の晋吾、それにこの継母の久恵と四人で、ラーメン店の棟続きの奥の住居で暮らしていた。

本屋から戻った時、久恵は背中を丸めて居間のテーブルでテレビを見ていた。

「お母さん…これでいいですか？」

「ああ、ありがとう…どれどれ…」と久恵は手に取ってエンディングノートをめくる。

「なるほど、これが広告に載っていたものなんだね。ページ数も結構多いなあ。全部書き込むには時間がかかりそう」

「この本って一種の遺言じゃない。お母さんはこれを書こうと思ってるの？」

「ええ、暇がある時に書こうかなあと思ってね。もう七十四歳にもなっ

たし、そろそろ旅立つことも考えていないとね。皆に迷惑もかけたくな
いから…」笑いながら久恵が答える。

「そんなこと考えているの？早過ぎない？」

「元気なうちにやっとかないとね…。言わば、遺言って自分の生きた証
しを残すことだと思おうし、それに、例えばこのページ、遺産についても
相続人を指定する欄もあるみたいだよ。…もつとも財産は特に無いから
問題はないけど…」

「……………」

「こっちのページは将来の祭祀についての希望を書くページだわ」

「…祭祀？」

「お墓や法事などの先祖を祀る行事のことよ」

「ああ…」

「簡潔に書き込めるようになってるわ」

「……………」

「祭祀と言えは私の葬式だけど、この世に未練はないし質素にして欲し
いわ。参列者は身内だけにしてね。そのことも書いておくから…」

「えっ…………自分の葬式のことまで書くの？」

「そうだよ…と言いながら久恵は微笑んだ。

「それに早苗ちゃん、このエンディングノートを書くことや、その内容
についてはとくに秘密にすることでもないから、心配だったらいつでも
見ていいよ。私の人生の節目として書くんだから…」

「心配なんてないよ…」と早苗は首を横に振る。

その時、長女の優香が二階から降りてきた。

「お母さん、やはり晋吾は起きないよ…何度起こしても生返事ばかりで
瞼も開けないの」

「体を揺らしてごらん」

「やってみただけど昨日と全く同じ…」

「どうしたのかなあ。もう昼をとくに過ぎていくのに…」

「今日もなの？」眉をひそめて久恵が早苗の顔を覗き込んだ。

「ええ…一体どうしたんでしょうね…」

「…食欲はあるんだろう？」

「以前と比べると少しは落ちたかな…でも食欲はあるようです。しかし、…こんなことが一週間以上続いて…これは病気なのかなあ？」

「熱があるわけでもないのだろうか？」

「ええ、熱も頭痛も無いんです。ただ眠り続けて、午後の四時過ぎ頃になるとやっと起きるんだけど、起きてからは以前と変わったところはないし……」

ともかく起きるまで話しかけて…と優香に頼みながら、早苗は深い溜息をついた。

十三歳になる長男の晋吾は、市立の第三中学校の一年生である。夏休みに入った七月の終わり頃から、朝寝坊どころか昼になっても、さらに午後二時を過ぎても起きれなくなっていた。

それがすでに一週間以上続いている。日中は昏々とベッドで眠り続け、声をかけても体を揺すっても起きないのだ。そして毎日、午後三時を過ぎる頃から気だるそうに動き出し、起きると今度は夜になっても眠らない。その後は深夜まで起きている。まるで昼と夜が逆転したような生活を送っていた。

理由を聞いても判然としない。ベッドに横になっても眠れないと言う。今は夏休みだからいいが、二学期になってもこのような状態が続くと学校に行けるのだろうか？と心配でたまらない。

『やはり病院に連れて行こう』と早苗は思った。

翌日の午後四時過ぎに、晋吾の目覚めを待つようにして店を閉め、内科病院の門を連れ立ってくぐった。

「何も異常は見あたりません…疲れてあるのではないですか？血液検査などをしても通常の数値と変わりはありませんし、時間が薬です…心配する必要はありません…」と初老の医師は言った。

「でも…」

「異常がないから薬も必要ではありません」

「はあ…」

「晋吾君だったね…早寝早起きしないとダメだよ…。体には何も変わっ

たところはないし、健康そのものだからね…」

しかし、その後も症状は変わらず、一週間後、今度は違う病院に連れて行ったが、その医師も首をひねった。さらに数日後、もう一軒の病院を訪ねてみたものの結果は同じだった。

原因が判らないままに、夏休みもすでに半分以上が過ぎ、後二週間もすれば二学期が始まるというのに、これでは本当に学校に行けなくなるのではないか…。早苗の胸に不安がよぎる。

どうすればいいのだろうか？

「医者の問題ないと言ったんだろう…」先日買ったエンディングノートを、テーブルの上で書き込みながら『誰か相談する人いないかねえ…』とペンを止めて、久恵がつぶやく。

「ところで、エンディングノート、少しは進んだ？」と早苗が話題を変えて訊いた。

「昔のことを思い出しながら書いているけど、自叙伝を書いているようだなかなか面白いものだよ」

書いていない時は、目につくようにテーブルの上に無造作に置いてある。…秘密ではないからいつ見てもいいよ…と言っていたが、そのような思惑もあるのだろうか。

その時、姉の清子が引き戸を開けて訪ねてきた。

「先月分の集金、いいかなあ？」 麵の代金の集金だ。

早苗よりも二歳年上の清子は、製麵工場を営む家に嫁いでいた。

「いい時に来た、ちよつと話があるんだけど…上がって」と引き留め、清子にお茶を出しながら現在の晋吾の様子を話す。

「昼と夜が逆転しているのよ。原因には心当たりはないし、これからどうしたらいいのか…不安で…」

「病院では異常はないと言うのね？」

早苗の説明を聞いた清子は、首を傾げて訊いた。

「ええ、三軒の病院とも結果は同じなの。…この状態がいつまで続くのかと思うと、心配で、心配で…」

「そっだよねえ…しかしおかしな症状だね。聞いたことないなあ」

「キツネに憑かれるなんて話があるけど、まさかそんな迷信みたいなことはあるはずないだろうし…」肩を落とした早苗は、無力感漂う弱々しい声で答えた。

「……」

バツイチの早苗にとって、親身な相談相手と言えればやはり姉の清子である。

日常のことは久恵とも話し合っているが、子育てのことやプライベートなこととなると、世代的に同じ清子を頼りにしていた。

ただ、話を聞いてもらいさえすれば気が休まることもあり、時には、世間話を交えながら長話に興じることもあった。

「キツネに憑かれる……？」清子が首を傾げながら、つぶやくように言った。

「ううん、そんなことを本気で考えているのではないよ…例えばの話だけどね…。気休めに、お祓いでもしてもらった方がいいのかなあ…て」

「そっだねえ。何かにすがりたくなるわよねえ。」

「ええ」

「待てよ？早苗ちゃん。阿倍先生のところに行ってみない…」

「阿倍先生？」

「実はね、私のところは自営でしょう…いろいろと経営上の問題やら雇用している人との問題、時には取引先とのいざこざで迷うことが一杯あるのね…どう解決していいか判らない時にお訊ねをするのよ。神様にお伺いを立てるの。つまり阿倍先生のところに言って神様の判断を仰ぐのね」

「そんなこと、信じられる？占いでしょう？」

「信じるとか信じられないとかではなくて、右か左か、結論を出せない時にすぐく頼りになるのよ。今までも阿倍先生に随分助けて貰っているわ。晋吾君の場合、果たして助言を貰えるかどうか判らないけどワラにもすがる思いなんでしょうっ…」

「まあ…」煮え切らない返事で答えた。

「行ってみたら…」

「…うーん…。しかしなあ、私はあんまりそんなこと信じないしねえ」
額に眉を寄せながら早苗はつぶやくように言った。

そう言えば、姉の清子は子供のころから占いなどのオカルト的なものを信じるころがあった。なにかあれば、前世からの因縁に原因があるのではないかと、宿命論的に判断する傾向にあった。

そのような姉と比べ、早苗は現実主義である。占いや超常現象的な非科学的なことに関心がなかった。

確かに、晋吾の症状は素人ながら普通ではないと思うし、清子の言うようにワラにもすがりたい心境であることも確かだ。急を要する状況だと思いつつも、もうひとつ気持ちが進まない。信頼する姉の勧めではあっても、神様にお伺いするなどと言う非現実的なことでこの状況が解決するとは思えなかった。

「気休めかもしれないけど…単なる助言だと思えばいいのよ。当たるも八卦当たらぬも八卦って言うでしょう…」

「うーん、そうねえ」と、気乗りしない口調とともに早苗はため息をついた。

「尋ねに行ったからと言って、特にリスクがあるわけではないし…」

「…うーん…」

不本意ではあったが、姉の強い勧めもあり、翌日の土曜日の午後、早苗は清子に連れられて阿倍秀麗の元を訪ねた。

山の裾野に建てられた掘っ立て小屋と見まがうようないろりの中で、八〇歳を超すかと思われる老婆が待っていた。本名は阿倍秀子と云い法名として秀麗という号を名乗っているらしい。

早苗の説明を聞く間も、ニコニコと穏やかな笑顔を絶やさないう。

「それは心配ですねえ…早速神様に聞いてみましょう」

「よろしくお願いします」

「晋吾君は、現在第三中学校の一年生、十三歳で長男ですね。ところで家族構成は？それとお父様のお名前は？」と、秀麗は大きなうそく火を点けながら早苗に質問する。

「名前は武田和彦と言います。健在なんですけど、今から十年前に離婚しまして、現在は長女と継母との四人暮らしです」

「はい…判りました」

秀麗は、仏壇に向かってゆっくりと念仏を唱え始めた。

晋吾に関係する家族の名前を次々に読み上げながら、現在の症状を説明していく。時には切々と、時には低音で唸るような声を出しながら拝み続けた。

十分ほど経って、深々と頭を下げてから早苗に振りかえった。

「秋山さん…神様は病気だと言われています。医者ではないから具体的な内容までは判りません。頭に関係しているようですね。」

「頭…？」

「はい、頭です。つまり脳や神経なのですが、精神科とか脳外科などのある大きな病院に行ってみられませんか…例えば大病院とか…」

頭に関する病気だと言う。早苗は首を傾げながら『わかりました…』と答えたものの、やはり釈然としない。すでに街医者ではあるが、三軒の病院に診てもらっているのだ。そこで原因が判らないと言われている。大病院に行ったところで簡単に原因が判明するのだろうか？

「ところで…」秀麗が、二人を交互に眺めながらゆっくりと話し始めた。

「秋山さん…それから清子さん。いいですか。人は、必ずしがらみというものを持っています。身の回りの人とのしがらみは当然として、先祖から受け継いだしがらみなど、血の繋がりがらみから生まれる抜け難いしがらみなど、いろんなしがらみに囲まれて生きています。」

「……」早苗と清子は、黙って秀麗の唇を見つめていた

「そのような中でも、いわば血の繋がりのある先祖から受けるしがらみからは逃げることはできません。悪い影響を与えるしがらみを怨念と言ったりすることもあります」

「……」

怨念などということが、この世にあるのだろうか？早苗は胸の中で呟きながら、やはり違和感を感じていた。

現実主義者の早苗にとって、しがらみとか先祖からの因縁だとか、ま

さしくオカルト的な事象との関連でもって説明されることを受け入れることはできなかった。生理的にも拒否反応があり、そのような考え方を理解し、消化することができなかった。

しかし早苗は黙って聞いていた。

「供養を忘れている方はありませんか？例えば水子で亡くなった貴方たちの兄弟さんで、名前も付けられなくて忘れられている人とか…あるいは、これまでなにもしてあげなかった人とか…」

早苗は首を傾げた。晋吾の病氣の原因が、いかにも怨念にあるかのような解説に向かっている。

厭だなあ…と思いながらも、早苗は特に反論はしなかった。漠然とながらも秀麗の言う言葉を反芻していた。

供養を忘れている先祖はいないか？…って。秋山家の先祖供養だって滞りなく行っているはずだし、特に不義理しているような先祖のことは思い浮かばない。

でも…しかし…。

後頭部に電気を当てられたような気がした。忘れている人、何もしてあげなかった人が『いる…』と、思った。

占いやオカルト的なことを信じない早苗であるが、その一瞬『…まさか…』と思った。

丁寧な挨拶をして秀麗のいろりを出た二人は、車までの畦道を歩きながら、さっきの秀麗の話を考えていた。

「ねえ…」と同時に口を開いた。

「私たちの生みの親だけど…」と清子が言った。

「うん…私も同じこと考えていた」と早苗も答えた。

二人の脳裏に同時に浮かんだのは、清子と早苗それに長兄の克己を産んだ、今は亡き実の母の豊子のことであった。

父親の清作に嫁ぎ三人の兄妹を産んだものの離婚。ある冬の日に忽然と姿を消した豊子のことを思い出していたのだ。

子供の元を去ってから七年後、亡くなったとの知らせが届き、幼い三

人の兄と妹は愕然としたもののなすすべもなく、『豊子が亡くなった…。母が死んだ…』と、子供心にも人の世の無情を知っただけだった。

会いたくとも会うことは出来ない存在となった生みの親。忘れることが哀しみを克服することであった。

そして、三人の兄妹の脳裏からは次第にその面影が薄くなり、いつしか供養をしなければならぬ対象からも消えていった。

実母と別れてからすでに三十八年。

『供養を忘れている方はありませんか?』と、訊かれて初めて思い当たったのだ。

「亡くなっているのよね?どこに祀られているか知っている?」

清子が眉間に皺を寄せて早苗の顔を覗き込みながら聞いた。

「お墓のこと?」と早苗。

「亡くなっていることは聞いたけど、お墓がどこにあるか知らないのよ…」

「私も知らないわ…十歳を過ぎた頃かなあ、…亡くなったよ…て、叔母さんから教えられたきりだから…」

「私たちを捨てた人だけど…」と清子が言った。

捨てた人?…早苗の胸にその言葉が痛みを伴って突き刺さる。

「やはり亡くなってしまうえば…お参りに行くべきかもね…」清子が続けて言う。

「ええ、そうだよね」相槌を打つ。

この後何をすればいいの?早苗が清子を見つめた

「じゃー私が、お墓がどこにあるか調べてみる…」と清子。

「うん、お願いします」

「しかし、まさか…晋吾君のことを相談に来て、生みの親の墓を探すことになろうとはね、全く予想もしなかったわ」

「……」早苗は清子の言葉を黙って聞いていた。

「第一、おかあさんと言えば、私たちにとっては久恵お母さんしか思いつかないわよね。一番苦しいところに育ててくれた親だしさ…」

「そうよね。突然、血の繋がりのない私たち三人の母親になって、それ

も貧乏の中で。苦勞しただろうなあ、きつと」

早苗は、自宅の居間で背中を丸めてエンディングノートを書いている久恵のことに想いを馳せた。

家を出るときに『原因が分かるといいけどねえ』と血の繋がりのある本当の孫のことに晋吾のことを心配してくれた久恵。私たち兄妹は、血脈のある関係よりも強い絆で結ばれている母子ではないだろうかと思う。

清作の元に嫁いできた時から、苦勞の連続だったはずだ。特に父親はわがままな人間で、自分の意見だけを主張する性格だった。そのような中であって、自己中心的な父親より、はるかに私たちのことを気遣ってくれていた…と早苗は思う。

「ところでお姉さん、お母さんだけど、エンディングノートを書いていること知っている？」

「エンディングノートって何？」

「一種の遺言よ。正式なものではなくって、本屋さんで買ってきたもので、項目ごとに書き綴れるようになった私製遺言みたいなものなの。自分が亡くなったあとに周りに迷惑を掛けたくないからだって…。いつでも見ていいからってテーブルの上に置いてあるのよ」

「すごい覚悟だね。死ぬことまで考えているのかあ。昔からお母さんは肝っ玉が座っているよねえ。ところでそのノートだけど早苗は読んだの？」

「いえ、こっそり読むのは気が引けて…まだ読んでない」

「読んでいいのじゃない。むしろどのように考えているか前もって判って欲しいということかも知れないよ。読んだら教えて！」

「そうね…いつでも読めるし…夜にでも読んでみるわ」

その夜、久恵が寝静まった頃を見計らって、テーブルの上に置いてあったエンディングノートを早苗は手に取ってめくった。

最初のページには『自分の生い立ち』というコーナーがあり、子供時代の両親や兄弟との思い出が綴られ、さらに次のページには、二十代の

頃からの久恵の歴史が書いてある。

『結婚』についてのページもあった。

三十九歳にて秋山清作の再婚相手として結婚する。そこには、清作の性格や先妻である豊子と清作の離婚に至った経緯も詳しく書いてあった。

父の秋山清作と実母の豊子が離婚したのは、長男の克己が九歳、長女の清子が七歳、末っ子の早苗が五歳の時であった。当時は、農業をしていた祖父母も健在で、さらに清作の妹もいて八人家族の大所帯であった。

そのような多くの家族で、生計を一つで賄うというだけでも大変なのに、山師的などころがある清作は、農業には見向かず何かと新しい仕事に手を出したがった。つまり、一攫千金を夢見ては新しい商売に手を出し、そして次々と失敗する。残るのは借財だけであった。

その上長男としてチャホヤされながら育った清作は、自己中心的で我儘などころがあり、周りの者に対する配慮や優しさに欠けていたのである。

独りよがりで新しい仕事に手を出し失敗すると、その原因を人に転嫁する。優しさに欠け、妻に対しての思いやりも無い。

そのような中で実母は絶望し、当時優しく接してくれていた他の男性に惹かれていき、そしていつしか、不倫関係になった…と書いてある。

早苗の知らないことであった。実母の豊子が…不倫？本当のことだろうか？信じられなかった。

でも、そう言えばどうしても忘れられないある場面の記憶がある。

早苗が五歳になった冬、深夜の午前二時を回った頃だった。トイレに起きた早苗は、離れに住む両親が言い争いをしている声を聞いた。縁側の戸板の隙間から覗くと、離れの玄関の前で両親が向き合っている。もっぱら父親の清作が母の豊子をなじっていた。

父が最後に手を挙げ、頬を殴られた母が吹き飛ばのように地面に倒れた。

両親の間に何があったのか？恐怖で立ちすくんで覗き見していた。

当時五歳だった早苗には、豊子の記憶はほとんどなかったが、ただその

深夜に見た両親のシルエットだけは今も鮮明に覚えていた。

そして次の日、母親の姿が三人の兄妹の前から消えていた。

久恵のエンディングノートには、清作や祖母の話によると…として、豊子の性格にも触れていた。

わがままな性格で、子供に対する愛情も薄かったようだ、だから、子供を残して出て行った、と祖母の言葉として記してある。

そういえば、早苗は今でも、その時の祖母の言葉を覚えている。

『お母さんは貴女たちを捨てたのよ…。可愛いと思うなら出て行かないはず。冷たい女なんだから』

早苗の記憶と久恵の記述がどこか一致する。

当時、早苗は村の人たちからもぶしつけな質問を浴びた。『離婚したの？あなたたちを残して出ていかれたのね？』

いかにも興味本位の質問は、幼い子供の心を傷つけた。道路を歩くと、通り過ぎた大人たちが背後でヒソヒソと話す。

離婚の少なかった時代、秋山家の出来事は、娯楽もない退屈な日々を送る田舎の人々に格好の話題を提供した。

久恵の書いている内容からすると、過ちを犯した者として石もて追われたようだ。

しかし、久恵はなんでこんなに詳しく清作と豊子のことを記しているのだろう？さらに奇妙な書き込みがあった。

『克己さん、清子さん、早苗さんへ。…もし、あなた達の生みの親のことをもっと詳しく知りたければ、仏壇の奥を覗いて見て下さい』とある。

仏壇の奥？そこに何があるのだろう？生みの親について知りたければ…と書いてある。何が隠してあるのだろう？それは私たちが見たことのないものであるはずだ。何だかおどろおどろしいものかも知れない。すぐには見たくないが、いずれ時期がくれば見てみよう。

遺言ともいべき久恵のエンディングノートを読みながら、呆然となつていった。自分の身の周りに起こったことなのに知らないことが多すぎる。断片的な記憶の中には肝心な部分が欠落しているのだ。

幼児の時代のことだから仕方ないにしても、豊子は子供に薄情な性格で、さらに離婚の原因が不倫にあることなど、その内容はショックだった。

久恵は、結婚後の生活についても詳しく綴っていた。

早苗が初めて久恵と会ったのは十歳の時であった。そのときの様子を早苗は今でもはっきりと覚えている。

結婚披露宴が終わったその夜、清作が三人の兄妹を座敷に座らせ、久恵を紹介した。

「今日からお前たちの母親になる久恵だ。お母さんと呼ぶように」

父親の頭ごなしの命令に、早苗は、えっ？と思った。母と呼べる人は、会えなくなったにしろ豊子しか居ない。なのに、昨日まで知らなかった人を、父親は強権的にお母さんと呼べと言う。

当然、早苗には違和感があった。簡単に、『お母さん…』とは呼べなかった。それに、思いやりのない父親に従うことに躊躇があった。理不尽にも思えたのだ。

そのような中で、久恵は想像以上に気を使ってくれたが、血の繋がったよその親子とは違い、簡単にコミュニケーションがとれるはずもなかった。

継母と幼い子供たちの間で、遠慮しがちな関係が続いた。一番年下の早苗は尚更のことで、孤独と寂しい思いを味わっていた。

本来なら、優しく包み込んで親としての愛情を注いでくれるはずの父親は、相変わらず自己中心的で、早苗をかまってはくれなかった。

そのような父親だったから、亡くなった今でも、畏敬の念や情愛を感じる対象になりえていなかった。今も尚、好きになれないのだ。辛くて寂しい少女時代を過ごしたと思う。

早苗は、エンディングノートと自分の記憶とを重ね合わせながら、昔のことを思い出していた。

さらに、久恵が嫁いできてからの生活は、苦勞の連続であったことも書かれていた。夫である清作は、地道に仕事をする姿勢に欠け、そのため秋山家は、経済的にも困窮を極め極貧生活を余儀なくされていた。食

べていくこともままならない時代であった。

そこで久恵は、当てにできない清作に見切りをつけると、居抜きのお店を貸り、そこでラーメン屋を開業。やっと、早苗たち兄妹は三度の食事にありつけるようになっていく。

そのような時…訃報が届いたのだ。

「貴方たちのお母さん…亡くなったそうよ」叔母が知らせてくれた。

「…」その時、早苗十二歳。何と答えていいかわからなかった。ただ目頭が熱くなったことを覚えている。

亡くなったと聞いた豊子の記憶は、その後ますます薄いものとなり、さらには、離婚から七年の歳月が経ち、その間断絶した関係の母子であれば、その想いも遠いものとなっていった。

一方その頃から、三度の食事のままならなかった秋山家の経済状態は、久恵の頑張りもあり人並みの生活ができるようになっていた。そして姉の清子が二十二歳の時に、取引をしていた製麺屋の跡取りに見初められ結婚。笑いがこぼれる家庭となっていた。

まだ未完成だが、ここまでに書かれているエンディングノットを読み終わると、早苗はため息をついた。久恵の歴史を描いているはずなのに、その内容は清作を含む私たち家族全員のことと、その上、実母の豊子のことまで描かれている。愕然とした気分になった。

ところが―

二日後、清子が早苗に電話してきた。

「驚いたらダメよ。実は豊子お母さんだけど、生きているのよ」

「えっ？どう言うこと…」

「死んではいなかったってこと…叔母さんに聞いたら教えてくれた。実は私たちにはウソをついていたのだった」

「そんなあ…」

「で…実は何人かを辿って行って連絡先も判ったのよ。大阪に住んでいた」

「まさか…私たちは騙されていたの？周りのみんなに…」

「そう言うことよ・・・ちよつとメモして：電話番号、教えるから」
あまりのことに早苗は呆然となっていた。実母が生きていたのだ。

「墓参り、これでする必要なくなったわね」

「ええ…」と答えながら電話番号をメモする。早苗の胸で早鐘のような鼓動が打っていた。

生きていたのだ。なんとということだろう。死んでいると聞いていたから心の奥に封印していたのに…。

「それとね、早苗、驚いたらダメよ。実は、豊子お母さん、再婚をしているらしいの」

「えっ？」

生きているというニュースだけでも驚愕なのに、その上新たな事実には再婚しているという想像もつかない知らせである。

早苗の頭の中は混濁としてパニック状態に陥っていた。

「ねえ早苗、生みの親の豊子お母さんのこと、どう思っている」

清子の唐突な質問だった。

「どう言うこと？」頭の中は真っ白で朦朧とした状態の中で聞き返す。

「豊子お母さんに会いたい？」

「：わからない。お姉さんは？」

「私は会わない・・・私たちを捨てた人だもん」清子の『捨てた』という言葉に、早苗は哀しくなった。

「亡くなった人を祀らないと怖いことになりそうで、墓参りをしようと思っただけ、生きている豊子お母さんには会いたいと思わないのよ…」

「わかった。ところで明日は、晋吾を佐賀医科大学に連れて行こうと思っっているの。店は臨時休業にするから、麵は要らないから…」

「了解しました。晋吾ちゃんの病氣一日でも早く良くなるといいね」